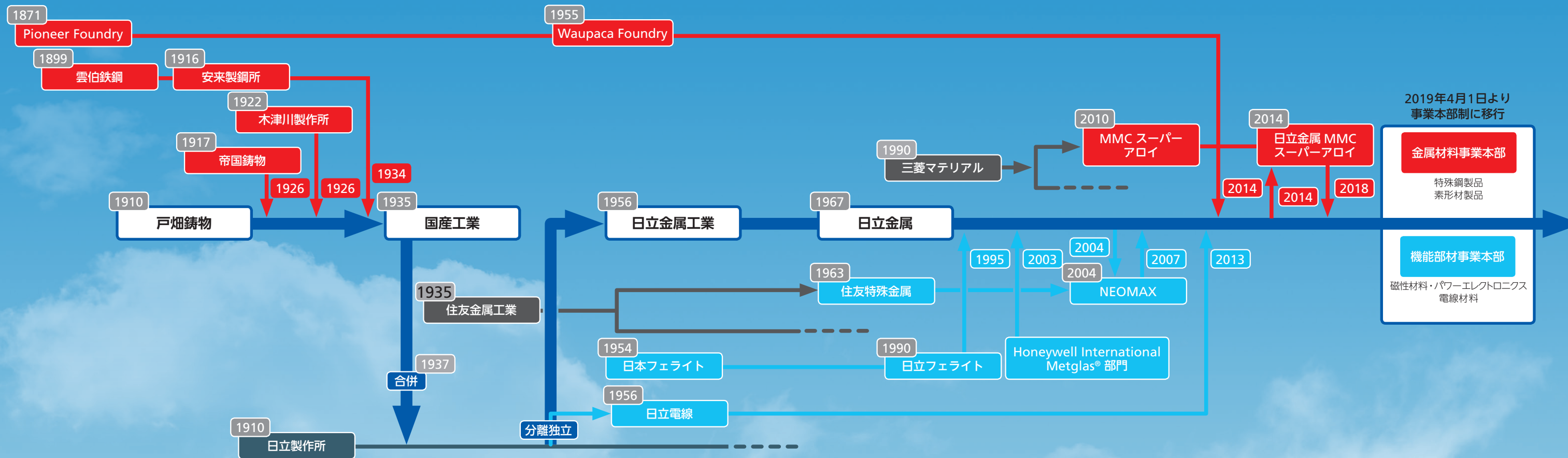


# 価値創造の歩み

日立金属グループは、100年以上にわたる歴史の中で、M&Aを繰り返しながら成長を続けてきました。その過程で形成された多様な技術、製品、事業ポートフォリオは、私たちの競争優位の源泉であり、また、この多様性が「日立金属らしさ」を形づくるものでもあります。私たちは、技術の変化が激しい素材分野において、歴史の中で培ったこの多様性を伸ばし、強化することで、お客様や社会にとってなくてはならない存在であり続けます。



1900	1950	2000	2010	2020
<p><b>1910 戸畑鑄物</b> 近代化の途上にあった日本が、工業品のほとんどを輸入に頼っていた時期、可鍛鑄鉄の製造技術を取得した鮎川義介が、日立金属の前身である戸畑鑄物を設立。1911年に「ひょうたん印」のマレブル(黒心可鍛鑄鉄)管継手の生産を開始した。その後、造船用品、鉄道用品、紡績機用品など生産品目を増やし、製品の優秀性が認められ、順調に受注を増やした。それと並行して鉄鋼圧延用ロールを生産する帝国鑄物、管継手を生産する木津川製作所、鋼を生産する安来製鋼所を合併し、業容を多様化させた。</p> <p><b>1935 国産工業</b> 戸畑鑄物が、事業分野を重工業全般にさらに拡大する中で社名を変更。</p> <p><b>1956 日立金属工業</b> 戸畑鑄物をルーツに持つ戸畑・深川・桑名・若松・安来の5工場を含む日立製作所鉄鋼部門が分離独立し、日立金属工業設立。</p>	<p><b>1967 日立金属</b> 日立金属工業から日立金属に社名変更。独創的なものづくりと積極的なM&amp;Aによって変化を繰り返しながら、世界でも屈指の材料メーカーへ成長。現在は、自動車のEV化や産業・インフラ、エレクトロニクスの進歩に貢献する技術やサービスをグローバルに提供。</p> <p><b>1995 日立フェライト</b> 自動車やエレクトロニクス製品などのノイズ対策で需要が高まる軟磁性材料事業強化のため、1995年に日立フェライトを吸収合併。</p> <p><b>2003 Honeywell International Metglas® 部門</b> 米国Honeywell InternationalのMetglas®(アモルファス金属材料)部門を買収。小型軽量化・省エネルギー・電磁波ノイズ対策など、エレクトロニクス分野で需要が拡大する軟磁性材料事業を強化。</p>	<p><b>2007 NEOMAX</b> 日立金属の磁石部門と住友特殊金属を統合して設立され、自動車電装用や家電用のモーターに広く使われる高性能ネオジム磁石やフェライト磁石を生産。自動車用モーターなどに需要拡大が見込まれる中、磁性材料事業を一体化することでシナジー効果を高めるため、2007年に合併。</p> <p><b>2013 日立電線</b> 日立グループにおいて電線・ケーブル事業を行う日立電線と2013年に合併。低炭素社会の実現に向けた社会の動きが加速する中、自動車、エレクトロニクス、産業インフラの各分野で技術・販売面のシナジーを創出。</p>	<p><b>2014 Waupaca Foundry</b> 自動車用鑄物で世界No.1の規模を持ち、北米市場で圧倒的なシェアを誇るWaupaca Foundryを2014年に子会社化。世界最大の鉄鑄物サプライヤーとして事業領域を拡大。</p> <p><b>2014 日立金属 MMC スーパーアロイ</b> 航空機・エネルギーなど基幹産業でのグローバルな成長に向けて、航空機部材の豊富な実績と技術力を持つMMCスーパーアロイを子会社化。2018年4月に日立金属桶川工場発足。</p>	<p><b>2021/3 7,616 億円</b></p>